中国語史研究におけるテキストの問題

2013.10.14 於秋田大学
竹越　孝（神戸市外国語大学）

１．はじめに

太田辰夫氏が『中国語歴史文法』（江南書院，1958 年）のあとがきに「言葉の歴史的研究にあたって、最も大切なことは資料の選択である。資料の選択如何は研究の成果を決定的に左右する。」と述べた通り、言語の内容ではなく形式を問題にする通時的研究にあっては、テキストの扱いが死活的に重要である。小稿では、中国語史研究においてテキストを扱う際に注意が必要となる事例をいくつか紹介し、あわせて今後どのような方向に進むべきかについて私見を述べてみようと思う。なお、筆者の専門は近世中国語であり、小稿もこの分野に関する話題が中心となることをお断りしておく。

２．影印本に見られる問題

文学にせよ思想にせよ語学にせよ、できる限り一次資料に基づいて研究を進めるのが理想であることは言うまでもない。一次資料へのアクセスがかなわない場合に影印を用いることになるが、影印が一次資料そのものでないことは常に意識しておくべきであろう。

朝鮮半島で 14 世紀末に成立したとされる中国語会話教科書『老乞大』・『朴通事』には、いくつかの改訂版が存在する。これらは基本的に同じ内容で言語の変化だけを反映しているため、近世中国語における音韻・語彙・語法面での変化を観察するのに最も適した資料の一つと言える。なかでも貴重なのは、崔世珍（1467-1543）により初めて諺解[1]が付されたテキスト、いわゆる『翻訳老乞大・朴通事』（1517 年以前）であり、乙亥活字のテキストが残されている[2]。これらはハングルによって漢字の音節を表しているのみならず、ハングルの傍らに付した点（声点）によって声調をも示している点が特に重要である[3]。朝鮮語アクセントの表記法を利用して中国語の声調を表す方法は崔世珍の独創であり、我々はこれによって 16 世紀初における中国語の発音を当時の声調まで復元することが可能となる。

しかし、現行の影印本[4]によってこうした復元作業を行うのは問題がある。というのも、影印の際に原本に見られる加点や汚れを消すため、誤って声点までが消されてしまった箇所が散見するからで、声点のない箇所をはじめから無点の形と判断できないのである[5]。この問題点が克服され、原本の声点をも忠実に反映した影印本は、まだ刊行されていない。

---

[1] 中国語の本文に、ハングルによる漢字注音と朝鮮語訳を付したバージョン。
[2] 乙亥活字は 1455 年鋳造の銅活字。なお、『翻訳朴通事』は上巻のみ現存し、『翻訳老乞大』は活字本の覆刻が残されている。
[3] 左右二種類の注音のうち、左側音に付された声点は調類（無点が平声、一点が去声及び入声、二点が上声）を表し、右側音に付された声点は調値（無点が低平調、一点が高平調、二点が上昇調）を表す。
[4] 最も早い影印本として『朴通事上』（慶北大学校，1959 年）、『飜譯老乞大巻上』（中央大学校，1972 年）、『飜譯老乞大巻下』（仁荷大学校，1975 年）があり、以後のものはすべてこれらの再印である。
[5] もちろん、用例を複数集めることによって本来の形を推定することは可能である。遠藤光暁『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』（好文出版，1990 年）参照。

影印にあたって最も良い底本が選択されているとは限らない場合もある。朝鮮王朝時代の活字本には、印刷された後で誤字が見つかった場合に、その部分を切除して紙を貼り正しい字に直す「訂正」という現象が見られる。当時、活字本は100部程度しか印刷されず、その大部分は王から臣下や官衙への下賜品（内賜本）となっていた。内賜本は王の権威の象徴であり、また覆刻本の版下にもなる以上、誤字があることは許されないので、紙を貼ってでも訂正するわけである[6]。

『老乞大』の改訂版の一つである『老乞大諺解』（1670年）は、ソウル大学校奎章閣に4種所蔵されている。その内訳は、王宮の倉庫だった「廂庫」の印を持つものが 3 種、そうでないものが 1 種であるが、前者は訂正が施されていないテキスト、後者は訂正が施されたテキストである。『老乞大諺解』は 1944 年に『奎章閣叢書』第 9 として影印が刊行されたが、底本となったのが未訂正の廂庫本であったために、これに基づいて（特に漢字音の）研究を進めるのに不安を残す結果となった。なぜ廂庫本が影印の底本となったのかについて、安秉禧氏は、一般に「廂庫」の印を持つテキストは紙質が良く善本が多いことから、書物の外見と先入観によって選定されたのではないかと推測している[7]。

『老乞大諺解』はその後2003年に『奎章閣資料叢書・語学篇』の1冊として新たに影印が刊行されたが、またしても同じ未訂正本が底本に用いられたのは残念なことである。

３．校訂本に見られる問題

中国語史の分野でも、特に語彙・語法面の研究にあっては、信頼できる校訂本が不可欠である。かつて、入矢義高、太田辰夫、田中謙二といった碩学が、敦煌変文、禅語録、『朱子語類』、元代白話碑、『元典章』、元雑劇などを対象として、精密な校訂と厖大な読書量に基づく研究成果を陸続と世に問い、中国で出た校訂本に対してもさかんに物申していたのは、日本の優良な研究伝統を物語るものであろう。

中国で1990年代に刊行された『近代漢語語法資料彙編』[8]は、言語資料のスタンダードを作るという目的で、それぞれの時代における代表的な口語文献を集め校訂を施したものである。これによって語彙・語法面における変化の傾向をつかむという手法は既に一般化している感があるが、そこに落とし穴が潜んでいることはあまり知られていない。

例えば、唐五代巻所収の『大目乾連冥間救母変文』[9]には脱文がある。いま『敦煌変文集』（人民文学出版社，1957年）によって示すと以下の通りである（下線部が脱落箇所）。

> 從得飯已來，母子更不<u>見。目連諸處尋覓阿孃不見，悲泣雨淚，來向仏前，遶仏三匝，却住一面，合掌胡跪。白言：「世尊，阿孃喫飯成火，喫水成火，蒙世尊慈悲，救得阿孃火難之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來，母子更不</u>相見。爲當堕於地獄，爲復向

[6] この「訂正」という現象については、藤本幸夫「朝鮮本の訂正に就いて―『重修政和経史証類備用本草』を中心にして―」（『朝鮮文化研究』1号，1994年）を参照。
[7] 安秉禧「《老乞大》와 그 諺解書의 異本」（『人文論叢』35号，1996年）。
[8] 劉堅・蔣紹愚主編，商務印書館，唐五代巻（1990年）、宋代巻（1992年）、元代明代巻（1995年）の3冊。
[9] 江藍生校録、底本は大英図書館所蔵の Stein No.2614。

餓鬼之途？」（下冊，743 頁）[10]

なぜこのような脱文が生じたかは明らかで、「母子更不見」と「母子更不相見」という似通った表現があったために、筆録の際に視点が移動してしまったということであろう。筆者の確認した限りでは、元代明代巻所収の『直説大学要略』・『大学直解』にも同じタイプの脱文が認められる[11]。

こうしたミスが生じ、またそれが見過ごされた背景には、しばしば「木を見て森を見ない」と批判される語学研究者の姿勢があると思われる。一般に、語学研究者は内容を理解するために読むというよりは、用例を収集するために読むという傾向が強いからである。同書に対する全面的な検証がなされないままに語料のスタンダードとして流通している現状は皮肉というべきであろう。

４．日本の研究と中国の研究

派生的な問題として、テキスト研究をめぐる日本と中国のスタイルの違いと、それがもたらした現状について言及しておきたい。

中国語史の分野に関して言えば、日本の研究者は伝来の漢籍を利用し得るなど一次資料へのアクセスが比較的容易であり、また図書館のシステムも整っているので、テキストの研究に関しては恵まれた環境にある。その結果、日本人研究者は細部にこだわった分析を志向する傾向にあり、一般的に「細かさ」が日本の研究の特徴と捉えられている。

一方、現在の中国の研究者は一次資料へのアクセスが難しい分、二次資料、三次資料を通覧して大量に用例を収集し、大雑把ではあるがそれを基に仮説を立てるという研究スタイルが主流となっており、その傾向はコーパスの整備が進むにつれてますます顕著となっている。最もよく使われるコーパスとしては、大陸では北京大学中国語言学中心の CCL 語料庫、台湾では中央研究院の漢籍電子文献がある。

大量のテキストを短時間で読むことに関しては、中国語を母語としない外国人は明らかに分が悪い。そして、新規参入者の増大と、publish or perish 式の論文生産競争の浸透によって、今や中国のテキスト研究のあり方がスタンダードとなり、日本的な研究のあり方は急速にその存在感を失いつつあるように思われる。

これは通時的研究に限ったことではない。現代中国語文法を中心とする理論的研究の分野では、欧米から発信された新しい理論を日本人研究者がいち早く取り入れて論文を発表し、それをアジア諸国の研究者が追いかけるといった状況もかつては見られたが、現在は必ずしもそうではなく、中国人研究者はむしろ日本を飛び越して理論的研究の中心地であるアメリカを見ている感がある。そうした中で、日本の研究は先人の遺産をあらかた消費し尽くして、進むべき方向性を見出し得ないでいるように感じられる。

---

[10] 『近代漢語語法資料彙編・唐五代巻』の当該箇所（407 頁）では、「從得飯已來，母子更不相見。『爲當墮於地獄，爲復向餓鬼之途？』」として引用符号が付加されている。

[11] 拙稿「《近代汉语语法资料汇编》脱文三则」（『KOTONOHA』19 号，2004 年）を参照。これらについては底本に四庫全書本を用いている点も問題である。

文学や思想の分野とおそらくは異なり、中国語学の分野では日常的に中国語で研究発表を行い、中国語で論文を書くことが求められる。日本中国語学会では、ここ数年全国大会の発表者のうち三分の二が中国人であり[12]、全発表のおよそ半分は中国語で行われている。いわば他の分野に先んじてグローバル化しているために、こうした問題を意識せざるを得ないということかもしれない。

ただ、筆者自身は上に述べたような状況を必ずしも憂うべきことと思っていない。「真理は単純である」という標語のもと、いわば共通の方法論で研究を進めている以上は、世界中の研究者が同じ土壌で切磋琢磨できるのはむしろ喜ばしいと考えている。私見によれば、今後は外国人であることを意識した研究、日本人にしかできない研究を行い、かつそれを中国語で発信していく必要があるように思う。

５．おわりに

小稿では中国語史研究においてテキストを扱う際の注意点について述べるとともに、テキスト研究をめぐる中国語史および中国語学全般の現状についても紹介した。後者はあくまで筆者の主観に基づくものであり、必ずしも同じ現状認識に立たないという中国語学研究者も多いかもしれない。ただ、今後世界の中で日本の研究がいかなる地位を占めていくべきか、どのように他国の研究と差別化を図っていくかという点は、いずれは誰しもが直面しなければならない課題であり、それは文学・思想の分野にあっても同様と思う。

[12] 日本の大学に所属する教員、日本の大学院に在籍する留学生、及び海外の院生と研究者を合計した数。